

思い出すまま

その2

2004

伊藤 光男

まえがき

この度はからずも平成16年春の生存者叙勲にて瑞寶重光章を受章いたしました。生存者受勲というのはまだ生きているのかという響きがあり、また勲章をもらうようになったらおしまいだと日頃から思っていましたので複雑な思いです。受章にさいし多くの方々から身に余るご祝意を賜り、皆様のご厚情にたいしだんだん受章を素直によるこぶ気持ちになってきました。また、東北大量子化学研究室同窓生および分子研関係の有志の方々によるお祝いの会を催していただき感謝の気持ちで一杯です。

お祝いの会の幹事の方からこのさい画文集を出さないかとのお申し出があり、いろいろと考えたすえ、ご好意に甘えることになりました。ご承知のように50才を過ぎた頃から趣味としてスケッチを始めるようになり、これまで画文集“思い出すまま”（1992年）、画集“つれづれに”（1997年）、画集“つれづれに その2”（2004年）を出しました。皆様のご好意を受け、画文集“思い出すまま”（1992年）の続きという形で“思い出すまま その2”としてまとめたのがこの本です。まったく個人的な海外での思い出を中心に文と絵を取めたものです。大部分の絵は現場でのスケッチに基づいていますが、1960, 1961, 1972年付けの数枚の絵は当時の写真や記憶にたよって今回仕上げたものです。当時はスケッチの趣味をまだ持っていませんでしたので悪しからずご了承願います。

本画文集に宇田川康夫東北大教授、中村宏樹分子研所長のご丁寧な暖かいご祝辞をいただき身に余る光栄です。本書を刊行できましたのは一重に祝う会の方々のお陰でして、とくに岡本祐幸分子研助教授には企画から出版まで並々ならぬお世話をいただきました。またブラザー印刷株式会社の岡田光司専務取締役には印刷に当たり特別なご配慮をいただき厚くお礼申し上げます。

2004年 7月

伊藤 光男

目次

まえがき……………伊藤光男	
サンフランシスコ ……………	2
／サンフランシスコ、Union Squareの夜景	
マジソン 1 ……………	4
／ウイスコンシン大学、Bascom Hall	
マジソン 2 ……………	6
／マジソン、State Street	
グレイハウンドバス 1 ……………	8
／シガゴ中心部、シカゴリバー、ミシガン湖	
グレイハウンドバス 2 ……………	10
／Duke大学	
ナイアガラ ……………	12
／ナイアガラ、アメリカ滝	
モントリオール ……………	14
／モントリオール旧市街のプラス・ダルム	
ナンシー ……………	16
／ナンシーの夕暮れ	
パリー 1 セーヌ川 ……………	18
／パリー、エッフェル塔、アレキサンダー三世橋、セーヌ川	
パリー 2 北駅 ……………	20
／パリー、北駅前	
パリー 3 パンテオン ……………	22
／パリー、パンテオン	
パリー 4 ムフタール通り ……………	24
／パリー、ムフタール通り	
パリー 5 魚介料理 ……………	26
／パリー、Hotel Champlainよりサクレ・クールを望む	
フィレンツェ ……………	28
／フィレンツェ、花の聖母堂	

インド バンガロー	30
／インド、バンガローのインド科学研究所	
ノルマンディー 1 オンフルール	32
／オンフルールの港	
ノルマンディー 2 ルーアン	34
／ルーアン、旧市場広場	
ノルマンディー 3 モン・サン・ミッシェル	36
／モン・サン・ミッシェルの朝	
ポルトガル 1 ポルト	38
／ポルト	
ポルトガル 2 アベイロ	40
／アベイロ	
ポルトガル 3 コインブラ	42
／コインブラ	
ポルトガル 4 ナザレ	44
／ナザレ	
ポルトガル 5 リスボン	46
／リスボン	
ポルトガル 6 ロカ岬	48
／ロカ岬	
ラジオ体操	50
／教育の森公園の女性像	
分子研名誉助教授	52
／無題	
須賀利	54
／須賀利	
祝辞	56

サンフランシスコ

1960年8月30日、当時、九大助手の私は家内を伴いアメリカ留学のため羽田空港を後にしました。たまたまホノルル経由サンフランシスコ行き日航の最初のジェット機DC4で、色々の祝賀行事があり、機内では東京一流店の江戸前鮎等が振舞われ最高のサービスで感激しました。100名程度の乗客でしたが、日本人は私共夫婦をふくめ数名で、あとはアメリカ人ばかりでした。当時、羽田から最終目的地のシカゴまでの片道運賃が約20万円で、これは私の九大での月給1万5千円の1年以上の金額です。幸い、私は文部省在外研究員に採用され旅費は文部省から支給されましたが、家内の分はもちろん自己負担で、親から大借金しました。今日、みなさんが気楽に海外旅行していますが、当時は海外旅行など夢のまた夢という時代でした。

サンフランシスコに着き空港から市内へのハイウェイの立派さに驚きながら、なんとか無事にホテルに辿り着きました。翌日のシカゴ行き便を、シカゴで出迎えてくれる知人に電報で知らせるため街に出て郵便局を探しました。Union Square付近で花売りのおじさんに聞いてみたがサッパリ聞きとれません。通りがかりの2、3の人に尋ねたが同じことで途方にくれました。日本では英会話はかなり勉強しある程度自信があっただけに大いにショックでした。それではと言うことで今度は家内がMarket Streetの交差点で交通整理しているポリスマンの所にノコノコでかけ聞いたところ一発で分かり、目的の郵便局は近くのビルの地下にあることが分かりました。家内の英会話力をみくびっていた私にとっては二重のショックでした。ところでやっと郵便局を見つけたものの、電報は郵便局でなくWestern Union という所で扱っていることを知り、またWestern Unionを探す破目になりました。なんとか電報は打てたものの心身ともにヘトヘトの状態でした。

ホテルに帰り一休みしたあと近くのレストランで夕食をとることにしました。ところが今度はメニューがさっぱり分からない。当てずっぽに指さして注文したところ、出てきたのはレタスを丸ごと真っ二つにしたものとドレッシングで、これには閉口しました。家内は隣の席でアメリカ人の夫婦が食べているアレが欲しいと言うのですが、極度の英語恐怖に陥っている私にはとても注文できず、家内を押さえるのが精一杯でした。というわけでアメリカでの最初の日のサンフランシスコはサンザンでしたが今となれば懐かしい思い出です。

絵はそれから34年後の1994年に家内とともにUnion Squareに面したホテルに泊まったとき、部屋からUnion Square付近の夜景を描きなぐったものです。



サンフランシスコ、Union Squareの夜景 (1994.6)

サインペン、水彩、F3

マジソン 1

1960年9月1日よりシカゴの北、ウイコンシン州の州都マジソンのウイコンシン大学化学教室で博士研究員として2年間、分子分光学の研究に従事しました。最初の1年はE.Kosower助教授、2年目はR.West助教授の研究室に所属し、ほとんど自由に研究をさせていただきました。博士研究員としての年俸は6900ドルで、当時1ドル=360円の時代ですので約250万円です。九大での月給は1万5千円程度でしたので日本で約15倍の月給になります。というわけで、おかげで家内の旅費の大借金も2, 3ヶ月の節約で返すことができました。しかし、実感としては1ドル=100円程度で、日本にくらべ物価が非常に高いという印象でした。最初のうちは節約に努めていましたが、アメリカ生活に慣れるにつれだんだん生活が派手になり、週末は友達を呼んだり呼ばれたり、また車を駆使してドライブを楽しみ、アメリカ生活を大いに楽しみました。狭い我が家のアパートは単身でウイコンシン大に来られている日本人研究者や留学生の溜り場のようにになりました。そのなかには高分子化学で著名な小寺 明先生（故人東京教育大学教授）、レオロジー研究の第一人者 二宮和彦さん（元日本合成ゴムKK. 研究所長）等がおられました。アメリカでの治療にこられた原爆乙女の方々も来られました。

当時、日本人は少なく、日本から大学への来客があると案内役として駆り出されることが多かったようです。もっとも印象に残っているのは心理学で著名な東大教授の方です。もう60才近い方ですが英語がすこし不自由なので私が案内するように頼まれ、関係の2, 3の研究室を訪ねました。その時、この東大教授とウイコンシン大の研究者とのやりとりを横で見ている、必要に応じて通訳しなければならないと思っていたのですが、その必要は全くありませんでした。東大教授の方の発する断片的な単語の羅列が相手に深い共感と刺激を与えていることがはっきり分かりました。言葉を超越して人間の中身が滲み出すことをこの時ほど実感したことはありませんでした。



ウイスコンシン大学、Bascom Hall (1960.9)

サインペン、水彩、F3

マジソン 2

一方、家内も2年間のマジソン生活を大いに満喫し、マジソンが第2の故郷とまで思うようになりました。色んな会合に招かれ、ある意味では私より忙しかったようです。当時招く方は日本人女性に和服の着物姿を期待していましたので、着物で出かけることが多く、着物の裾を手繰り上げて車を運転する家内をはしたないと思うと同時に色気を感じたものです。大学のInternational Fairでソニーに頼まれポータブルテレビの宣伝をやらされたこともあり、また小学校であまりやったこともない日本舞踊を披露したこともあったようです。それだけ日本にたいする関心が非常に高かったようです。ある夜、私達夫婦があるコミュニティの会合に招かれ、箸の使い方をデモンストレーションすることになりました。私が注釈を加えながら実演したのですが、横に座っていた家内が突然“それはちがう”と発言し正しい使い方を示し、おかげでこちらは面目丸つぶれということもありました。

いづれにしても2年間のマジソン生活は生涯の最高の年でした。しかし、帰国する段になって、普段の浪費がたたり家内の帰国旅費が怪しくなり困っていたところ、Tax Returnがあり、また格安の貨客船がみつき、家内はやっと帰国することができました。私は文部省から旅費がでていたので一足早く飛行機で帰国しましたが、船で帰った家内のほうはすばらしい船旅を満喫したようです。



マジソン、State Street (1960.12)

サインペン、水彩、F3

グレイハウンドバス 1

1960～1962年のアメリカ滞在中グレイハウンドバスを利用して各地に旅行しました。最初の長距離バス旅行は1961年3月に私の専門としている分子分光学の大家達を訪問したものでした。最初の訪問地はマジソンからはるか南のフロリダ州の州都タラハシーでした。そのフロリダ州立大学のM.Kasha教授にお会いするためでした。Kasha教授は分子の三重項状態の研究で画期的な業績をあげた著名な研究者で、彼の研究室には世界から俊英が集まっていました。

1961年3月、大雪のマジソンを出発しシカゴ経由でひたすら南下しました。グレイハウンドバスは格安であります、非常に乗り心地がよく、しかも主要都市を通り車窓から景色を楽しめる快適な交通手段でした。フロリダ行きの直行バスは定員の半分位の乗客でゆったりしていて、私共夫婦は最前列に陣取り途中の風景を楽しみました。南下してバスがケンタッキー州を過ぎる頃から、なんとなく乗客の席の移動が始まりました。気をつけてみると、黒人の方達がバスの後方座席に移動しているのです。あとで分かったのですが、当時、南部ではまだ黒人差別が残っていて、バスでも白人との同席は許されなかったのです。

さらに南下しジョージア州の小さい町でトイレ休憩があった時でした。バスが止まるやいなや我慢していた家内がトイレに駆け込んだのです。ところが、これが黒人専用のトイレだったのです。これに気づいた黒人のご婦人方はトイレに入らず前で彼女が出てくるのをじっと待っているのです。それとも知らない彼女はげげんな顔で出てきましたが、あとでそのことを知り大変気の毒なことをしたと恐縮しきりでした。今ではこのような差別はもちろんありませんが、当時は北から南部に旅行したときに戸惑うことが多かったようです。



シカゴ中心部、シカゴリバー、ミシガン湖 (1960.10)

サインペン、水彩、F3

グレイハウンドバス 2

フロリダにKasha教授を訪ねたあと、ふたたびグレイハウンドバスでジャクソンヴィル経由で北上し第2の目的地であるノースカロライナ州のDuke大学を訪ねました。ここの物理教室のH.Sponer教授はベンゼンの電子スペクトルの振動解析で著名な女性科学者であり、私の九大の大先輩である神田慶也先生（元九大学長）が留学していたところです。3月の終わりで大学のキャンパスのしだれ桜が満開で、それは美しい景色でした。

訪問を終わり、Sponer教授の自宅での昼食によばれました。メイドのいる南部独特の風格のある邸宅で感心していましたが、さらにびっくりしたのはそこでJ.Franck博士にお会いしたことです。Franck博士はノーベル物理学賞の受賞者でFranck-Condon原理等で有名な方です。Franck博士はドイツ時代のSponer教授の先生にあたり、このときたまたまSponer教授のところに身をよせていたのです。相当なお年でしたが気さくな方で、若いわれわれをもてなしていただき感激でした。その時の会話の内容は覚えていませんが、Sponer教授が席をはずしたすきに、小さい声で“彼女がきつくてねー”と不満をもらしたのが印象的でした。Franck教授が亡くなる数年前だったと思います。

その後、東部の2, 3の大学を訪問して3週間ぶりにマジソンに戻ってきました。ところで、バス旅行は安いと言っても、ホテル代をふくめて二人分の出費は相当なもので、食事等で儉約これ努めました。節約に貢献したのは日清のチキンラーメンでした。シカゴにトグリという日本食品の店がありました。戦時中、トウキョーローズと呼ばれた女性が対米ラジオ放送で活躍したことは有名ですが、この人がトグリの娘さんでした。トグリではじめてチキンラーメンに出会い、値段も味も手ごろなので、これを大量に仕入れ旅行に持ち回ったものです。今でもチキンラーメンを見ると、ホテルでお湯をそそいだチキンラーメンを家内と分け合って食べたのを思い出します。



Duke大学 (1961.3)

サインペン、水彩、F3

ナイアガラ

ナイアガラの滝を初めて見たのは1962年6月でした。この年、オハイオ州コロンバスのオハイオ州立大学で分子分光学の学会があり、そこで初めての英語による講演をしました。講演はまあまあでしたが、多くの質問にはたじたじで冷や汗ものでした。それから32年後、1994年6月、同じ学会に招待され冒頭講演をしました。講演の冒頭に32年前ここで発表したことを話し、キャンパスを背景に家内をとった写真をスライドで見せ、キャンパスの風景は32年前と同じで、“変わったのは家内だけだ”と言ったら、皆がいっせいに大笑いしました。同席していた家内がどう思ったかは知りませんが、あとの懇親会で多くの連中から“You are brave”と冷やかされました。

話しが横道にそれましたが、1962年の学会のあとナイアガラを訪ねました。初めて見る滝の壮大さと水量に圧倒され、アメリカ滝のそばの芝生に寝転び滝の轟音を聞きながら暫くの時間を過ごしました。34年後の1996年2月に全く同じ場所で約1時間過ごすはめになりました。この年、分子研とロチェスター大学との間で結ばれた協定にもとづいて、日米セミナーがロチェスター大学で開かれ分子研から10名程度の研究者が出席し、私も責任者として同行しました。セミナーの中日に出席した日本人研究者だけで近くのナイアガラに車で出かけました。厳冬期のナイアガラは、前回の夏とは一変し、ナイアガラリバーは一面氷結し、流れ落ちる水は厚い氷の下を流れているようでした。アメリカ滝を見た後、今度はカナダ側に行くことになりましたが、私だけがアメリカ側に取り残されました。所長というものは大変不便なもので、外国出張では用務先の国だけに限定された公用旅券なのです。したがって、公式用務のないカナダには行けないのです。こうして皆がカナダ側に行ったあと寒さに震えながら彼等の帰りを待ったのです。しかし、おかげでメッタに見れない氷結したナイアガラをスケッチすることができました。

絵はさらに6年後の2002年5月に念願のカナダ側から描いたアメリカ滝です。前回渡れなかったレインボーブリッジは絵の左にあります。



2002. 5. 22
Niagara Falls
Sheratonの窓より

ナイアガラ、アメリカ滝 (2002.5)

サインペン、水彩、F3

モントリオール

1985年の夏はアメリカ、カナダでの学会等で忙しい夏でした。先ず8月の中旬にアメリカ、ニューハンプシャー州でゴードン会議、その後カナダのモントリオールで量子化学国際会議、コーネル大学、ニューヨーク州立大学での講演でした。ゴードン会議の最中、ある朝、新聞を求めてドラッグストアに行くと、そこのおやじが新聞をふりがざし“おまえは日本人か？日本では大変なことがおこっているぞー”と言うのです。新聞を見ると、それが多数の犠牲者をだした日航機墜落事件でした。ニューハンプシャーの田舎のためくわしい情報は入らず、暗澹たる気持ちで次の目的地、カナダのモントリオールに向かいました。

モントリオール大学での量子化学国際会議は大変盛況で日本からも福井謙一先生をはじめ多くの日本人が出席していました。私にとって一つの収穫はノーベル化学賞のカナダのG.Herzberg博士との接触でした。それまでも何回かHerzberg先生にお会いしていましたが、このときは1対1でゆっくりお話する機会に恵まれました。この時、以前から気になっていたことを先生にお聞きしました。それは九大での私の恩師、故今西直先生が戦前の理研時代に分子分光学者のドイツ人D.S.Dieke博士と一緒に仕事をすることがあり、彼に大変影響を受けたと言っていたのを思い出したからです。Dieke博士がなぜ日本にきたのか、その後どうされたのか、同じ年代でしかも戦前ともにドイツに居られたHerzberg先生にお伺いしたわけです。先生は大変驚いた様子でドイツ時代のDieke博士のことをいろいろ話してくれました。“変わった男でねー。自分も気になるので調べてみよう”ということで別れました。その後、2、3ヶ月して先生からDieke博士の詳しい消息をしたためた手紙をいただきました。その内容は大変興味深いものでしたが、それにもまして一介の研究者の些細な問いに真摯に答えてくれたHerzberg先生の実直さに深い感銘を受けました。

絵はそれから17年後の2002年に再びモントリオールを訪ねる機会があり、オールドシイテイーのプラスダームをスケッチしたものです。17年前のフランス語一色から英語の勢力がまし、モントリオールも変わったなーという印象でした。



モントリオール旧市街のプラス・ダルム (2002.5)

サインペン、水彩、F3

ナンシー

1968年1月、当時東大物性研にいましたが、ある小さな国際会議がベイルートで開かれ、それに招かれて出席しました。この会議でフランス、ナンシー大学のA.Hadni教授から共同研究の申し出があり、一緒にやることを約束しました。その後、私が東北大に移る等で約束を果たせなかったのですが、化学教室が片平キャンパスから青葉山の新キャンパスに移転することになり、この移転期間中、研究を中断せざるを得ないことになり、この期間を利用してナンシー大学に行くことにしました。

1972年7月から1973年1月までの7ヶ月です。ナンシーはパリーの東約350 kmにある古い街で、20世紀初頭のアールヌーボー発祥の地として知られています。私はナンシー大学の物理教室に所属しました。この物理教室は熱力学のカルノーサイクルのカルノー教授がいたところで、中世の城のような建物でした。ナンシーにいた7ヶ月、ここで日本人に会った記憶が全くありません。当然のことながら一般の人は日本については全く無知で、富士山と芸者の国といった具合です。その芸者とは一体何なんだーというのが決まった質問でした。こちらも芸者とは付き合いはありませんので説明に苦労しました。ある日、街の電器屋に買い物に行った時、その主人が“お前は日本人か？チョット見せたいものがある”ということで店の奥の倉庫に連れて行かれました。そこには家庭電気製品が山積されていて、“これは全部お前の国からのものだ”と日本の製品が如何にすばらしいかを得々と語ってくれました。この時、日本も大したものだなーとうれしく思いました。

ナンシー滞在中のアパートはアールヌーボー調の家具や食器で溢れていました。どれもすばらしいものですが、惜しむらくは実用性に欠けていました。例えばベッドは映画に出てくるような天蓋付の彫刻のほどこされたダブルベッドですが、クッションが駄目で寝ると体がくの字になり参りました。また、風呂がなくシャワーだけで、このため風呂に入りにパリーのホテルに行ったものです。しかし、ナンシーでの生活はその後の私と家内のフランスかぶれに火をつけたのはたしかです。



ナンシーの夕暮れ (1972.10)

サインペン、水彩、F3

パリー 1 セーヌ川

パリーを最初に訪れたのは1968年1月です。ベイルートでの国際会議の後、ローマ経由でパリーのオルリー空港に着きました。当時、国際空港はオルリーのみで市内へはバスでアンバリッド駅に行くのが普通でした。アンバリッド駅は絵のセーヌ川にかかるアレキサンダー三世橋の左岸のたもとにあり、1974年にシャルル・ドゴール空港ができるまではパリーの玄関口で、パリーを訪れるたびに寄るなじみの場所でした。1968年の最初のパリーは正直言ってあまり芳しいものではありませんでした。アンバリッド駅で安ホテルを紹介してもらい、アンバリッドのロダン美術館にほど近い小さなホテルSuedeに泊まりました。エレベーターもなく、3階の小さな部屋でしたが、明らかに床が傾いているのです。また、部屋にビデーはあるがトイレはなく、トイレは3階共通のものが一つあるだけです。パリーの冬は夜が早く、着いた4時は真っ暗で、しかも雨で、陽光あふれるベイルート、ローマから来た者にとってはミゼラブルという感じでした。しかし、ホテルのフロントのおばちゃんは大変親切で、また朝食のパンがすごくうまかったのが救いでした。

4年後の1972年、ナンシー滞在中に再びこのホテルSuedeを訪ねました。驚いたことにこの安ホテルが三ツ星の近代的なホテルに変身していました。バス、トイレが完備された立派な部屋で以前のうらぶれた面影は全くありませんでした。家内はとても気に入り、ナンシー滞在中パリーに行くたびにこのホテルを利用しました。ナンシーの項で書きましたように、ナンシーのアパートには風呂がありませんでしたので、Suedeの風呂は1ヶ月1度の割合で来たパリーの最大の楽しみでした。

エッフェル塔とアレキサンダー三世橋を背景にしたセーヌ川で思い出すのは、1991年に東北大の研究室の連中と一緒にパリーに来たときのことです（パリー2の項参照）。日本のある企業の招待で、われわれ全員が夕食に招かれました。ちょうどこの絵を描いた場所に繋留された和食の船上レストラン“将軍”で、エッフェル塔とアレキサンダー三世橋を一望するすばらしいところでした。これぞパリーというセーヌの美しい夜景を楽しみながら、長旅で一同飢えていた和食をこころゆくまで堪能したのは忘れ得ぬ思い出です。その翌年パリーを訪ねた時にはこの“将軍”は姿を消していました。



パリー、エッフェル塔、アレキサンダー三世橋、セーヌ川 (1988.9) サインペン、水彩、F3

パリー 2 北駅

1991年7月から8月にかけて、当時の東北大学の研究室の職員をそそのかし一緒にヨーロッパ旅行に出かけました。東北大学の定年を来年にひかえ、私にとってはまさに修学旅行でした。同行したのは三上直彦さん（現東北大学教授）、江幡孝之さん（現広島大学教授）、藤井正明さん（現東工大教授）、それに家内でした。さらに旅行の途中から、当時アメリカ留学中だった鈴木俊法さん（現理研主任研究員）が加わりました。修学旅行といっても単なる物見遊山だけでなく、オランダのナイメーヘンでの国際学会と続いてパリーで開催のもう一つの国際会議に出席するためでした。

一行はパリーに着いた夜はパリー東駅前のホテルに泊まりました。東駅はナンシー滞在中よく利用していたなじみの駅で勝手を知っていました。ベルギー、オランダ方面に行くのは北駅で東駅とは隣り合わせなのです。翌朝、知ったかぶりをして彼等を誘導し東駅を通過して北駅に抜けようとしたのですが、地下道で迷い込んでしまいました。やっと柵越えに北駅が見える所にきて皆でこの柵をのりこえてやっとの思いで北駅に辿りつきました。地上を行けば何でもなかったのですが、反省しきりです。絵はその1年後に泊まったホテルの部屋から描いた北駅広場です。

列車はオランダに向け順調に走り、われわれ一行は一つのコンパートメントを占めることができ、快適な旅でした。途中、国境で出入国検査官が乗りこんできてパスポートの提示を求められました。それからが大変で、みんな用心のためパスポートを腹巻に入れていたので、バンドをゆるめズボンを下げてパスポートを取り出す作業をいっせいに始めたので、検査官は啞然とした面持ちで立ち尽していました。問題は家内です、人垣をつくって検査官の視線をブロックし、やっとのおもいでパスポート提示に至った次第です。現在はEU内では国境でのパスポート提示はありませんが、少々格好悪くても安全にはかえられませんので、今でも腹巻にしまい込んでいます。



パリー、北駅前 (1992.9)

サインペン、水彩、F3

パリー 3 パンテオン

カルチュ・ラタンの中心に位置するパンテオンはヴィクトル・ユゴーはじめフランスの偉人が埋葬されている国家的墓廟ですが、小高い丘にあるせいで旅行者にとってはよい目印になる建物です。パンテオンの正面からはルクサンプール公園越えにエッフェル塔が真正面に見え、スケッチには格好な場所です。周囲には庶民的なレストランやカフェがたくさんあり、スケッチの疲れを癒す気軽な場所としてよく利用しました。そのなかでパンテオンのすぐ側に家庭的な雰囲気の小さなレストランを見つけ、その後パリーに行くたびに立ち寄ったもので、いつも変わらない模様の店でいつもと同じ席に座ると、パリーにまた来たという実感が湧いたものです。

パリーのレストランで思い出があるのは、1972年のナンシー時代にパリーで初めて行った日本料理店です。当時、唯一の日本レストランはオペラ通りの横丁にあつた“たから”で現在もあるようです。日本食にはほとんど縁のない生活でしたので、久しぶりの和食に感激しました。食事中、家内が私をつつき、隣の男の人を指して“岩城宏之さんだ”と言うのです。見るとたしかに指揮者として有名な見覚えのある顔でした。現在はオペラ通りには日本レストランが溢れていますが、当時、“たから”は日本をしのぶ唯一の場所として、隔世の感があります。

真冬の夜のしっとりとしたオペラ通りの情景を忘れることができません。オペラ座もはね、人通りが少なくなった大通りを家内と散歩しながら、街角で売られているカキをレモンをかけてチュッとすすりこみ、“マロンショー、マロンショー”と売り込みの焼きぐり屋からアツアツの焼きぐりを買ひ、コートポケットにつっ込んで手をあたため、皮をむきながら口に放り込んだのが昨日のように思われます。夜更けのパリーは現在とても危険ですが、当時はそのような不安は全くありませんでした。よい時代でした。



パリー、パンテオン (1992.9)

サインペン、水彩、F3

パリー 4 ムフタール通り

ムフタール通りはカルチュ・ラタンのパンテオンの奥にある古びた細長い坂道で、この狭い通りとその横丁には肉屋、八百屋、果物屋、魚屋、パン屋、乳製品店などありとあらゆる食料品店や雑貨屋がずらりと軒を並べ、まさにパリーの庶民の市場です。売り子の呼び声がひびきわたり、買い物袋をさげたお客で賑わう様子は東京、上野のアメ横に通じるものがあります。昔、私の実家が食料品店を営んでおり、周囲の活気に溢れた市場の環境で育ったせい、都会の市場には特別の愛着を覚えるのです。

私の好きな洋画家の児玉幸雄画伯がムフタール通りを画材に多くの油絵を描いています。私もそれに影響され、ムフタール通りをスケッチしたいと思っていました。しかし、現実には甘くなく、市場の最も活気に溢れる時間帯は人に押されスケッチどころでなく、一方、買い物客が一段落し人通りの少なくなった昼下がりのムフタール通りは今一つ魅力に欠けます。要するに、市場は雑踏が最大の魅力なのです。しかし、この雑踏では通りに座り込むといういつもの手をつかうことはできません。そこではたと思いついたのは店のなかに入り込むことです。店で少しの買い物をし、その店の主人にたのんで店の奥に入れていただき描いたのがこの絵です。相当に窮屈な姿勢で描くことになりますが、店内からみた通りは一段と魅力的でした。描き終わったあと店の主人が絵をのぞきこみ、肩をたたいてくれました。その後も、時々この手を使ってムフタール通りのスケッチに励みました。



パリー、ムフタール通り (1992.9)

サインペン、水彩、F3

パリー 5 魚介料理

1988年9月、フランス大西洋岸地方のオレロン島でゴードン会議が開かれ、三上直彦さん（現東北大教授）、藤井正明さん（現東工大教授）とともに出席しました。オレロン島は大西洋に突き出した島でとくに観光地でもなく、寒村があるだけでしたが、コンドミニアム等の宿泊施設が整っていたためにこのゴードン会議の会場に選ばれたと思われます。ゴードン会議は科学の色々な分野についてテーマを決め、約100名程度の専門研究者が寝泊りをともにして約1週間討論を交わす場で、通常はアメリカ、ニューハンプシャー州の田舎町で開かれます。田舎町で開くのはこの間缶詰にし、誰も逃げ出せないようにするためだと言われています。オレロン島はまさに外界から孤立したところで、ゴードン会議には最適の場所だったようです。ゴードン会議では最終日の前夜に夕食会がひらかれるのが通例ですが、オレロン島での夕食会にはこの周辺でとれた新鮮な殻付かきが振舞われました。そのかきのおいしかったことは今も忘れることができません。

これに触発され、会議終了後に立ち寄るパリーで新鮮な魚介類をふんだんに食ってみたいと思いました。幸い会議から講演の謝礼が出ていましたので、三人でこれを使いきろうと決めました。パリーでのホテルはこの絵にあるChamplainというホテルで、部屋からサクレクール寺院がみえる庶民的なところでした。ホテルから歩いて10分位のところにサン・ラザール駅があり、その周辺には魚介類を食べさせるレストランがたくさんあります。

その一つに予約し、三上君、藤井君、私の3人で勇躍出かけました。レストランでの魚介料理ははじめてで、何を注文してよいか分かりませんでした。周囲のテーブルで取っているを参考にして、先ず殻付かき、それからムール貝、オマール、さらにブイヤベース（魚介類の煮込みスープ）を注文し、値段表によるとこれでもらった金は使いきると期待して待ちました。注文したものが次々に運ばれてくると、その量の多さに圧倒されました。とにかく机の上に魚介類が溢れる状態で、とても食いきれないと思うと途端に食欲がなくなりました。せっかくのおごりということで、三上、藤井両君は盛んに食ってくれましたが、最後は悲壮感もただよう状態で、彼等には悪いことをしたなーと思います。



パリー、Hotel Champlainよりサクレ・クールを望む (1988.9)

サインペン、水彩、F3

フィレンツェ

フランス、ナンシー滞在中、イタリアのフィレンツェ大学のS.Califano教授のお招きを受け1972年10月にはじめてフィレンツェを訪ねました。Califano教授はイタリアにおける振動分光学の第一人者で、優秀な研究員、学生をかかえ活気にみちた研究室でした。私は講演、討論のため3日間ここで過ごしました。

滞在中、教授が世話してくれたのは普通のホテルではなく、貴族の館でした。絵にある花の聖母堂に近い街の中心で、広い敷地にある歴史を感じさせる大邸宅でした。詳しいことはよく分かりませんが、斜陽の貴族が民宿的な経営をしていたものと思われそうですが、限られた客だけを受け入れていたようです。

玄関に入ると映画にでてくるような2階にのびた大階段があり、私と家内は2階の1室をあてがわれました。部屋自体は改装していたせいかな普通のホテルとあまり変わらないものでした。朝と夕の食事付で、食事のときは鐘の合図で宿泊客（20人くらい）が一斉に大食堂に集まり一緒に食事することになっていました。大食堂には真中に長いテーブルが据えられ、食器が整然と並べられ、両側に椅子がずらりと配置され、映画の中にいるような感じでした。女主人が長いテーブルの端に陣取り、みんな給仕される食事を黙々とするという感じでした。窮屈な食事だなーと思いました。しかし、さすがにと思ったのは食後のデザート的时候了。女主人が籠に盛られたりんごを皿にとり、りんごに手を触れることなくフォークとナイフを上手にを使って皮をむき、それを切り分けて周囲の客にサーブしたことです。その所作が実に優雅でほれほれしました。ほんものの貴族をみた感じでした。

最近では2003年3月に再訪の機会がありましたが、観光客が去った後の、夜の街のしっとりした雰囲気センチメンタルな旅情をかきたてられました。



フィレンツェ、花の聖母堂 (1992.10)

サインペン、水彩、F3

インド バンガロー

1978年9月、インド、バンガローでラマン国際会議が開かれそれに出席しました。バンガローの近代的ホテル、Ashok Hotelで会議が催され、日本からも多数の出席者を数えました。たまたま私は島内武彦先生（故人東大教授）とこのホテルで同室となり、先生のお相手をする格好になりました。会議初日は順調に推移し、先生もご機嫌で酒をくみかわす楽しい夜を過ごしました。ところが、翌朝、先生はベッドから起き上がれないのです。聞けば下痢がひどく夜中に相当苦しまれたようで、今日は会議に出ないとのこと。持参の薬を差し上げ、私は同じホテルの会場に行ったのですが、初日にくらべて極端に人が少ないのです。また、多くの講演がキャンセルされているのです。都合で会議に出席できずキャンセルされるのは分かるのですが、講演する本人に昨日会ったばかりの分もキャンセルされているのです。結局、島内先生と同じで、同じホテルにいるのだけれど、下痢でトイレから離れることができないのです。インドではよくある食当たりですが、とくに無防備な日本人に被害が多かったようです。

その後、バンガローとは縁があり、分子研所長時代の1994年と1997年に日本学術振興会の事業の1つであるアジア学術セミナーがここで開かれ、日本から多くの分子科学研究者が出席しました。1994年の時には会議直前にインドでペスト騒ぎがあり、日本からの出席者は多量のミネラルウォーターを持参するものもありましたが、台湾から出席したノーベル化学賞のY.T.Lee教授以外は大丈夫でした。1997年のセミナーは当時分子研教授であった塩谷光彦さん（現東大教授）が中心になって会議の運営がなされ、塩谷さんのおかげで大変みのりの多いセミナーになりました。セミナーの最終に近い日にAshok Hotelで野外のバンケットが行われましたが、ここで忽然と塩谷さんの姿が消えたのです。みんなで探したところ塩谷さんが意識不明で倒れており、病院にかつぎこみました。幸い大した事はなく、翌日には回復しましたが、世話人としての心労等で弱っていたところに何かに当たったものと思われれます。気の毒なことをしています。



インド、バンガローのインド科学研究所 (1997.12)

サインペン、水彩、F3

ノルマンディー 1 オンフルール

フランスのノルマンディー地方でスケッチをするのが長年の夢でした。モン・サン・ミッシェルの修道院、オンフルールの港、ルーアンの木組みの家等、たくさんの画家が題材にし、また多くの画集でしばしばお目にかかり、いつかは行ってみたいと思っていました。フランスには1968年以来しばしば訪れましたが、ノルマンディーはパリーから割りに近いにもかかわらず行く機会がありませんでした。

2000年9月にグループ・ツアーに参加し、はじめてノルマンディー地方を旅しました。グループ・ツアーは個人旅行と違って自由行動は許されません。これはと思う風景に出会っても時間が取れずフラストレーションだけがたまるという状況でした。しかし何時また来れるか分からないし、ここで諦めたら最後といろいろ考えました。先ず取った策は食事を抜くことでした。大概の場合、観光地での昼食時間が一時間程度あります。この時間をスケッチに当てることで十分な時間が稼げます。こうしてオンフルールの港で皆さんが昼食を取っている間に描いたのがこの絵です。添乗員の方がレストランに頼んでサンドイッチを作ってもらい、次の目的地へのバスでいただきご親切に感激しました。



オンフルールの港 (2000.9)

サインペン、水彩、F3

ノルマンディー 2 ルーアン

グループ・ツアーでスケッチの時間をつくる次の手は寺院や博物館の見学時間を利用し、皆さんが内部参観している間、外でスケッチすることです。寺院の内部は同じようなものが多く、また歴史や宗教的背景等に疎いものにとっては長々した説明はあまり有難くありません。この絵はルーアンで皆さんがジャンヌ・ダルク教会を見学している間に、その前にあるジャンヌ・ダルクが処刑された広場をスケッチしたものです。処刑の場所という暗いイメージはなく、華やかなレストランやカフェが並び、野菜や花などの市がたつところですよ。



ルーアン、旧市場広場 (2000.9)

サインペン、水彩、F3

ノルマンディー 3 モン・サン・ミッシェル

グループ・ツアーの場合、どう工夫してもスケッチするに十分な時間を物理的にとれないことのほうが多いです。モン・サン・ミッシェルの修道院は幸い自由時間が多く、また修道院敷地のなかのホテルに宿泊しましたので、あまり無理をせず、スケッチを2枚仕上げることができました。翌日早朝、バスでモン・サン・ミッシェルを後にしました。バスの運ちゃんが気をきかせて、モン・サン・ミッシェル島の全容が見える場所に停車し5分の写真撮影時間を取ってくれました。朝日に映えるモン・サン・ミッシェルは実に美しく、夢中でサインペンでなぐり描きました。この絵はその時のもので、彩色は後でしました。今はデジカメがありますので、取った写真をすぐ、いつでも見ることができ、それを参照しながら感動がさめないうちに移動のバスのなかや、トイレ休憩の時間に彩色ができます。

場合によっては時間をかけてスケッチしたものより気持ちの高ぶりがよくでているように思いました。むしろスケッチそのものは瞬間をとらえられるかどうかにかかっている、かけた時間の長短は問題ではないと思うようになりました。この時の経験からグループ・ツアーに限らず、短時間でスケッチするよう努めました。短時間で描きなぐったものを見ると、その時何に最も関心があったのかがはっきり分かります。一般に関心のあった対象は時には大きく、時には強く描かれていて、写真とくらべるとそれがはっきりします。現場で最初の1, 2分でなぞった線、曲線がもつとも重要で、それを活かせるかどうかで成否がきまるようです。まだまだ修業がたりず、道遠しの感です。



モン・サン・ミッシェルの朝 (2000.9)

サインペン、水彩、F3

ポルトガル 1 ポルト

今までほとんどの海外旅行は職務に関連した個人旅行で、海外でのスケッチは会議を抜け出して描いたものもありますが、大体週末を利用したものでした。グループ・ツアーは自由がきかず、スケッチには向いていないと思っていました。しかし、2000年9月にノルマンディーのグループ・ツアーに参加し、こちらのやり方次第でスケッチすることも出来ることが分かりました（ノルマンディー1, 2, 3参照）。それ以来、海外へのグループ・ツアーに参加する機会が多くなりました。

現在、色んな旅行会社で海外へのグループ・ツアーが企画され大はやりのようですが、それはそれなりの理由があります。第1は個人旅行では考えられないくらい格安です。第2に安いにもかかわらずホテルや食事が非常によいことです。たまたま個人旅行でも利用したことのあるホテルに泊ったことがあります。個人ではとてもこのようなよい部屋には入れませんでした。第3に荷物運搬、言葉、色んな折衝などの心配がないことです。これはわれわれのように歳をとり体力、気力ともに衰えたものには特に重要です。第4はプロがアレンジするので要所要所を要領よく回る事が出来、説明も日本語で聞けることです。自由がきかない、土地の人との接触がない、見知らぬ人と行動をともにするのはどうも…等、いろいろとデメリットもありますが、それもこちらの気持ち次第でメリットにすることもできます。

ごく最近では2004年3月にポルトガルへのグループ・ツアーに家内と参加しよい思い出をつくることができました。このところ歩きながらスケッチする術も覚え、またデジカメを最大限利用することによって、スケッチの枚数も多くなりました。ポルトガル1～6は今回のグループ・ツアーで描いた約30枚の一部です。

絵はポルトガル第2の都市、ポルトです。高台にあるポルト大聖堂の見学を失礼して、大聖堂前の高台広場から旧市街を見下ろしスケッチしたものです。洗濯物が風になびいているのが実によかったです。



ポルト (2004.3)

サインペン、水彩、F3

ポルトガル 2 アベイロ

ポルトの南にある水の都です。イタリアのヴェネツィアに例えられるところです。水に映った観光用の派手な船が印象的でした。

こちらが時間を気にしながら、一心不乱にスケッチしているところに日本人観光客の二人の若い女性が寄ってきて、この絵の景色を背景に二人を写してほしいとカメラを差し出しました。この時は断りました。こちらの都合も考えず、やたらに人をつかまえて自分らの写真をとってもらう勝手さには腹が立ちます。



アベイロ (2004.3)

サインペン、水彩、F3

ポルトガル3 コインブラ

ヨーロッパでもっとも古いとされるコインブラ大学のある街です。急な坂道にへばりつくように軒をつらねた建物風景はどの角度からでも絵になります。繁華街に座り込んで描きましたが、十分な時間がなく、彩色はデジカメを参考にしました。もう一度訪ねたいところです。



コインブラ (2004.3)

サインペン、水彩、F3

ポルトガル 4 ナザレ

リスボンの北に位置する典型的な漁村です。絵は大西洋と漁村を見下ろす断崖の上にある教会と広場です。絵にあるナッツ売りのおばさんが、バスから観光客が降りてくるたびに、スカートをめくり足をちらつかせて客引きしていました。努力にもかかわらず、あまり売れてなかったようです。

ナザレのレストランで食べたいわしの炭火焼はとてもおいしく、3匹を平らげ満足でした。



ナザレ (2004.3)

サインペン、水彩、F3

ポルトガル 5 リスボン

絵はポルトガルの首都リスボンの中心街です。起伏のはげしい地形に展開した街には、段差の大きい通りが隣り合って並行しており、それらが階段で結ばれ、至る所で面白い風景に出くわします。

アルファマ地区の路地裏のせまい坂道にひしめいた古い民家と洗濯物、夜のレストランで聞いたファドの哀しい歌声はリスボンの忘れがたい思い出になりました。



2004.3
Lisboa

リスボン (2004.3)

サインペン、水彩、F3

ポルトガル 6 　ロカ岬

ヨーロッパ大陸最西端の岬です。断崖の上に吹きつける海からの強風の中で、スケッチブックを抱きかかえながら描きなぐりました。足元に可憐な花がたくさん咲き誇っていたのが印象的でした。



ロカ岬 (2004.3)

サインペン、水彩、F3

ラジオ体操

東京の自宅マンションの裏に教育の森という公園があります。ここはまへの筑波大学のキャンパスでして、いまも筑波大学の学部の一部が残っており、また放送大学の分室もここにあります。公園にはユリの木や桜などの樹が多く、また文京区のスポーツセンター、運動場、広場が整備され市民の憩いの場となっています。この広場で毎朝ラジオ体操が催されています。参加者は近所にお住まいの退職された年配の方が主で、季節や天候によって人数に変動がありますが、厳冬期には10名足らず、夏休み時には小学生も加わって100名くらいになります。この会の特徴は年中無休ということです。正月であれ、休日であれ、また雨であろうと風であろうと毎日やるということです。雨の日はスポーツセンターの軒下を借りて行います。私と家内は東京に移転しました2001年から参加させていただき、いまでは常連になり、体操を通じてたくさんの仲間ができました。今では早朝の新鮮な空気を吸い、緑の多い環境で思いきり手足を伸ばすのが日課になりました。

さらに仲間にもそのかされて、ラジオ体操の指導者になるべく毎月1回の講習会に通っています。1回2時間程度、NHKのテレビ等で体操の指導をされている先生方の直接指導で、われわれ高齢者には相当ハードですが、今の所2年以上続いており、2通の修了書もいただきました。続けている最大の理由は会のあと仲間と一緒に一杯やるのが楽しいからです。

こうしてラジオ体操を通じて地域の方々との付き合いができ、大学や研究所時代とは異なる世界が広がり生きがいのひとつになっています。

絵は教育の森公園にある“ベンチに座った二人の若い女性像”です。



教育の森公園の女性像 (2001.11)

サインペン、水彩、F3

分子研名誉助教授

2001年、岡崎を去るとき、分子研助教授会が私のために一夜送別会を開いてくれました。その席で分子研名誉助教授の称号をいただきました。名誉教授はザラですが、名誉助教授とは聞いたこともありません。私にとっては明かな格下げですが、これほどうれしい格下げはありませんでした。私は分子研在職中、助教授のために特別なことをしたという意識は全くありませんが、助教授の方々がこの称号にこめた想いを知りじーんとしました。これはどのような栄誉や賞にもましてうれしく、これからも心の支えとして大切にしたいと思います。有難うございました。

名誉助教授称号 第号

伊藤光男 殿

あなたは分子科学研究所所
長として在任中おれおれ助教授
たちに厳しい叱咤と熱心激励
を与え物心両面から惜しみな
い支援をしてくださいました
またあなたのたぎる血潮と精
熱は おれおれ若手研究者の
鏡であります。よってここに
感謝の意を込め分子科学研究
所名誉助教授の称号を授与さ
せていただきます。

平成13年2月2日

分子科学研究所 助教授 伊藤



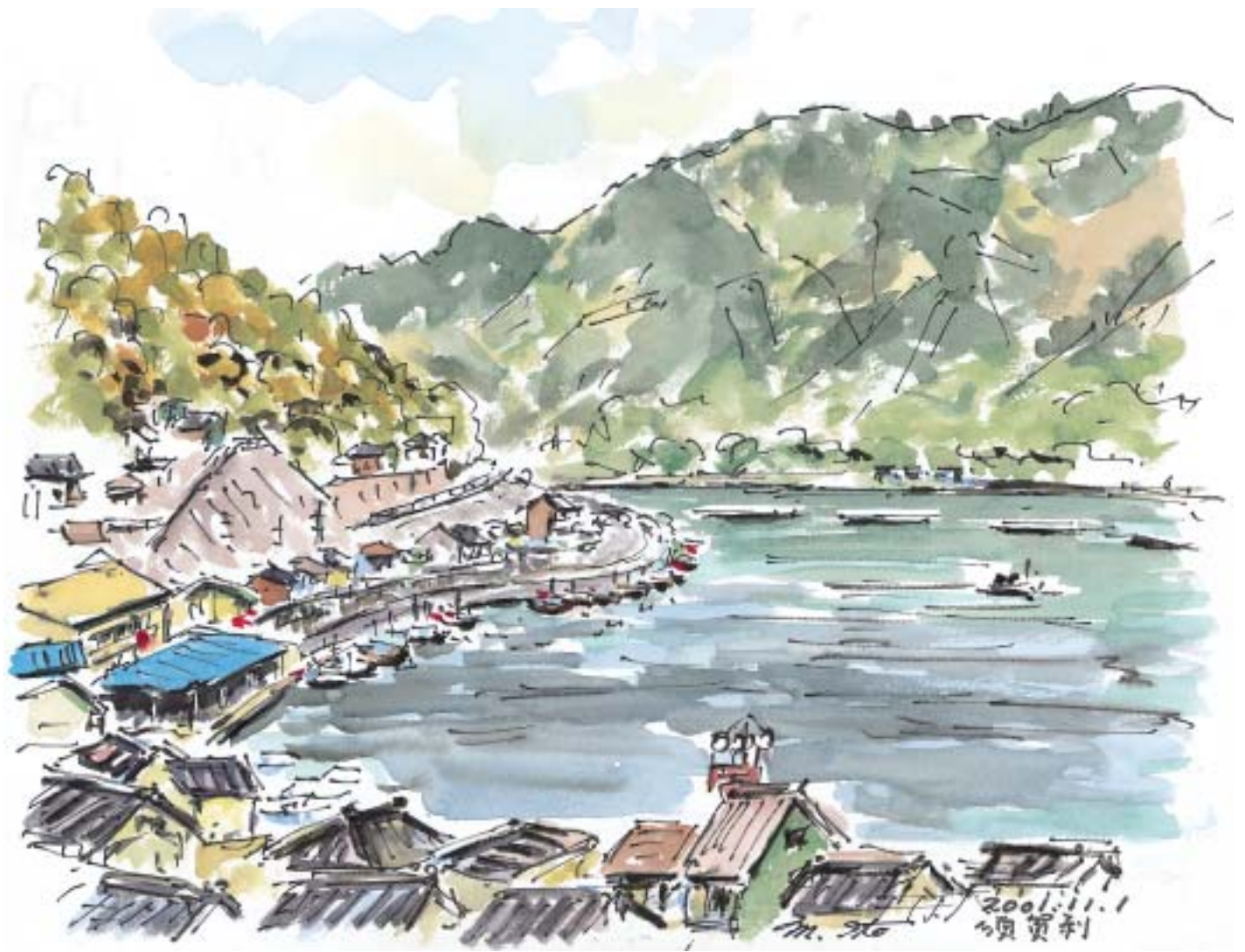
須賀利

三重県の須賀利（すがり）と言っても、知る人は少ないであろう。この小さな漁村は実は私（岡本）の郷里である。昭和29年の町村合併により、北牟婁郡須賀利村から尾鷲市須賀利町となった。典型的な過疎の町であり、私が通った尾鷲市立の須賀利中学校と須賀利小学校は、平成9年と平成13年にそれぞれ休校になってしまった。ある時伊藤先生が、「おまえの郷里の近くに大王崎があるが、そこでいつか絵を描いてみたいと思っている。」と仰ったので、私はこれはチャンスだと思い、「それでは、大王崎にご案内しましょう。但し、私の郷里も絵にして頂けませんか？」とお願いした。それで、伊藤先生が岡崎機構を退官された直後の2001年5月の連休中に、伊藤先生ご夫妻の他に平田文男教授夫妻と谷村吉隆助教授（現京大教授）を誘って、大王崎—浜島温泉—熊野古道伊勢路—那智の滝—熊野那智大社—那智勝浦温泉—須賀利と回る大旅行を企画したのであった。ところが、出発直前に伊藤先生の奥様が体調をくずされたので、残念ながら、ご夫妻が急遽参加されず、我々4人だけの旅となった。須賀利の絵ももう描いて頂けないだろうと諦めていたところ、伊藤先生が私の気持ちを察して下さったようで、後日、「とりあえず須賀利へ行って絵を描いてくる。」と仰った。そして、その年の11月初めに谷村さんと私が同行して、私の夢が叶った。結局、私の生家を含め、合計6枚も描いて下さったのである。

絵はそのうちの1枚で、私の母方の先祖（濱田家、漁船の船大工で元禄12年から私の母の兄弟の代までずっと地元で造船所をやっていた）が建てた、曹洞宗の普濟寺という寺の境内から見下ろした須賀利と須賀利湾の風景である。平地が少ないので、家が密集しているのが分かる。画面中央下右よりに火の見櫓が見える。また、画面左の青い大きな屋根は須賀利漁業協同組合の魚市場のものである。この2つの間の海岸沿いに、巡航船の船着き場の栈橋がある。

この場を借りて、伊藤先生の暖かい心遣いに改めて感謝したい。また、近いうちに、大王崎にご案内するのを忘れてはいけないことも思い出した。

岡本祐幸（分子研助教授）記す



須賀利 (2001.11)

サインペン、水彩、F3

伊藤光男先生の瑞宝重光章受章を祝って

伊藤光男先生がこの度瑞宝重光章を受章されました。永年教えを受けたものの一人として心からのお慶びを申し上げます。

先生は昭和4(1929)年3月24日、今の北九州市、若松のお生まれです。食料品店を営まれていたお父上が金光教の信者であったことからの命名と伺っていますが、あたかも分光学を専攻することを予見されていたようです。1951年に九州大学理学部をご卒業後すぐに助手として採用され、研究・教育の道に進まれましたが、それも教授の今西直先生の家へ寄宿して大学に通ったとのことですから、如何に将来を嘱望されていたかがわかるというものです。1960-62年にウィスコンシン大学に留学されましたが、写真がご趣味だった先生は「Mitsuoはアメリカをフラインダーを通して見る」と評されたそうです。

1966年1月に東大物性研に移られ、私事ですが、その直後に東大理学部の島内研のセミナーで初めて顔を拝見しました。D3だった藤山常毅さん(後に分子研教授・在任2年を経ずして逝去)から「ラマンの伊藤さん」と呼ばれている人だと教えられましたが、東北大御退官時に編まれた論文選集を今改めて眺めてみるといかにもと納得できます。転任直前の2年間の1964,5年などはいずれも単名でその殆どがJ.Chem.Phys.に印刷された8報の論文のタイトルが全て"Raman Spectra of"で始まっているくらいですから。当時は自記式の分光器が出回るようになった赤外分光が花形の時代でした。黒いカーテンで仕切った暗い部屋の一角で水銀灯を長時間露光した上で暗室にこもってワイシャツを汚しながら写真乾板を現像しなければならないラマン分光は如何にも時代遅れという印象を持っていたので、藤山さんの「ラマンの」という言葉に含まれていた敬意の響きはちょっと意外に感じたものです。駆出しの卒研生に予知できる由もありませんでしたが、この頃こそラマンルネッサンスが始まろうとしていた時でした。1960年に出現したレーザーが実用化されつつあったのです。物性研転任後は毎日のように昭島に通われ、日本電子で開発中のレーザーを使って実験され、翌1967年には早くも"Laser Excited Raman Spectra of"から始まる論文を発表し、それ以後分子性結晶の振動スペクトルと分子間力に関する論文が堰をきったように出版されていきました。僅か数年後に東北大に引き抜かれたのは当然の成行きだったと云えるでしょう。

1970年に仙台に移られてからは共鳴ラマン効果をはじめ多重共鳴、多光子分光等の手法を駆使して大振幅振動、回転異性体、高励起電子状態やイオン状態にと研究を展開されていかれま

した。茅幸二、三上直彦両先輩の驥尾に付して東北大伊藤研究室の立上げに参加できたのは何物にも代えがたい経験でした。10年ほどして茅さんと私が相前後して転出した後は、三上さんを中心として阿部晴雄、江幡孝之、藤井正明の諸氏が第二期のスタッフとして伊藤研の隆盛期を築きあげ、1988年に「レーザー分子分光学の開発と電子・振動状態の研究」で日本化学会賞を、翌1989年には「種々の多光子分光法の研究」で日本分光学会賞を受賞される運びとなりました。

第一画文集「思い出すまま」によると、先生が絵筆をとられるようになったのは1980年にオーストラリアでフィルムをきらしてしまった時、「クレヨンとスケッチブックを持っていることに気づ」いて以来とのことですが、こればかりは肯けません。画を描かないひとが海外旅行にスケッチブックを持っていくわけがありませんから。この頃から自信を持って「画を描く」と云えるようになったということでしょうか。仄聞するところによればいつの頃からか密かにご近所にお住まいのプロの画家に師事されていたようです。

1992年の先生の最終講義はまさに名講義でした。折々に描かれたスケッチを挿みながら研究と回想を行きつ戻りつのお話は聴衆を倦ませることがありませんでした。それが先にふれた「思い出すまま」となり、ついで画集「つれづれに」その1、その2と続きました。さしずめ今は「Mitsuoは世界をキャンバスの上でみる」ということになりましょうか。更に今回受章記念の「思い出すまま」その2が出版されることになったのは、まことに喜ばしい限りです。今後とも益々お元気で、奥様共々ご旅行とスケッチを楽しまれるようお願い申し上げます。

東北大伊藤研同窓会 宇田川康夫

伊藤光男先生の瑞宝重光章受章をお祝いして

伊藤先生、瑞宝重光章のご受章おめでとうございます。

宇田川教授による説明の通り、伊藤先生が研究面で立派なご業績を上げられたことは言うに及ばないことなのですが、伊藤先生が平成5年に分子科学研究所の所長になられてから、平成13年3月に岡崎国立共同研究機構の機構長を退官されるまでの間になされた行政面でのご業績も多岐に亘った優れたものであります。ここでその一端をご紹介します。

先ず、主幹と施設長とが一堂に会する主幹・施設長会議を始められたのが伊藤所長で、これによって、研究所全体の諸問題を纏めて議論する現在の首脳部体制が作られました。また、COE(センターオブイクセレンス)としての分子科学研究所は自ら厳しく点検・評価を行うべきであるとの考えから、国内の研究者のみならず外国人研究者をもお招きして、研究系と施設の点検・評価を行うシステムを確立されました。この内容は、今も引き続き出版されています「分子研レポート」に纏められ、報告される様になりました。これは、国内で高く評価されました。現在、「評価」の言葉が乱れ飛んでいます、本来、この様なピアレビューを基本とすべきであります。

この様な分子研の国内外の研究者による高い「評価」を基礎として、分子研の研究組織の拡充も行われました。「理論第四部門」の創設、施設の改組による「分子制御レーザー開発研究センター」と「分子物質開発研究センター」の設置がその大きな成果です。分子研の今に繋がる新たな飛躍を齎してくださいました。更には、岡崎の3研究所が一緒になって、未来に向かって、新しい学問分野を創造すべく「分子生命体科学共同研究推進センター」構想をまとめられました。「生命環境科学研究センター」がその前駆体として基礎生物学研究所に設置され、政府との厳しい折衝を経て、伊藤先生が岡崎機構の機構長の時代に、最終的に、「統合バイオサイエンスセンター」の設立が認められました。現在、見事に拡充され将来の発展が囑望されている同センターの礎を築かれた訳であります。岡崎機構の機構長の時代には、法人化の問題でもご苦労下さり、我々が基礎学術研究を行う研究機関であることを切々と訴え続けられました。今、我々の組織が独立行政法人ではなく、国立大学と同じ範疇の法人となれたのは、この様な努力の賜物であります。

以上、分子科学研究所に係わる点での先生のご業績のみを述べましたが、当然ながら、全国적으로ご活躍になっておられます。総研大評議員、学術審議会委員、日本化学会副会長、そして、多くの大学や研究所の評議員等々を務められました。とりわけ、基礎学術研究のあるべき姿を機会あるごとに訴え続けて下さったのは、今ある我々にとって本当に有難いことであります。ここで改めて御礼を申し上げたいと思います。

最後に、もう一度、伊藤先生、瑞宝重光章受章本当におめでとうございませう。

奥様共々何時までもご健勝であられますことを心よりお祈り申し上げます。

「伊藤先生を祝う有志の会」代表 中村 宏樹

伊藤光男 略歴

1929年 3月24日 北九州市若松区生まれ

学歴 1951年 3月 九州大学理学部化学科卒

職歴 1951年 5月 九州大学理学部助手
1966年 1月 東京大学物性研究所助教授
1970年 1月 東北大学理学部教授
1992年 4月 東北大学名誉教授
1993年 4月 岡崎国立共同研究機構
分子科学研究所長
1999年 4月 岡崎国立共同研究機構長
2001年 4月 分子科学研究所研究顧問

専門 物理化学

受賞 1988年 4月 日本化学会賞
1989年 5月 日本分光学会賞
1997年 4月 紫綬褒章
2004年 4月 瑞寶重光章

趣味 水彩スケッチ

1992年 3月 画文集“思い出すまま”出版
1997年 5月 画集“つれづれに”出版
2000年 11月 アダージョ芦屋（兵庫県芦屋市）にて
水彩画個展 “つれづれにⅠ”
2001年 3月 葵丘（愛知県岡崎市）にて
水彩画個展 “つれづれにⅡ”
2001年 4月 画集“つれづれに”再出版
2002年 10月 ギャラリーくぼた（東京京橋）にて
水彩画個展 “つれづれにⅢ”
2003年 10月 ギャラリーくぼた（東京京橋）にて
水彩画個展 “つれづれにⅣ”
2004年 4月 “つれづれに その2”出版
2004年 7月 “思い出すまま その2”出版

現住所 〒112-0012
東京都文京区大塚 3-3-14-402
Tel. 03-3941-8150

思い出すまま その2

平成16年7月24日発行

著者 伊藤 光男

編集・発行

伊藤光男先生の叙勲を祝う会

東北大学量子化学研究室同窓会

〒980-8578 仙台市荒巻字青菜

東北大学大学院理学研究科

化学専攻量子化学研究室内

分子科学研究所有志の会

〒444-8585 岡崎市明大寺町字西郷中38

分子科学研究室内

印刷所 ブラザー印刷株式会社